

イチジクの結果枝の誘引角度が生育と果実品質に及ぼす影響

イチジクの高主枝栽培において、収穫作業の労力軽減を目的に、結果枝の斜め方向への誘引方法を検討した結果、結果枝の生育や果実品質への影響は小さいことが分かった。

内 容

イチジクでは凍害回避に有効な樹形として、一部で一文字整枝の高主枝栽培が行われている。しかし全体的に結果枝の位置が高くなるため、従来どおり垂直方向へ誘引した場合、特に高位節で果実の収穫に労力がかかる。そこで着果位置を低く抑える手法として結果枝の斜め方向への誘引について検討し、結果枝の生育、樹冠内の受光環境および果実品質に及ぼす影響を調査した。

樹間及び列間は2.5mで主枝の高さが1.2mの4年生「栴井ドーフィン」を供試した。結果枝の誘引は2017年6月19日に一斉に開始し、慣行は垂直方向（以下、90度区）に、斜め方向へは水平に対して45度（以下、45度区）となるように誘引した。以後、結果枝の伸長に伴い随時誘引し、2017年7月19日に第20節を残して先端を摘心した。

結果枝の伸長について、処理区による差はみられず摘心後の第20節までの長さ、摘心後に発生した副梢の伸長についても差はみられなかった

表1 誘引角度が結果枝の生育に及ぼす影響

処理区	7/21		8/9		相対日射量 ^z	
	20節長 ^y (cm)	副梢長 ^x (cm)	副梢 節数 ^w	10節	15節	
90度(慣行)	126.5	12.3	5.5	26.4	42.3	
45度	124.1	9.6	4.7	27.9	43.2	
有意性 ^v	ns	ns	ns	ns	ns	

^z [各節幼果上面の日射量]/[樹冠外の日射量] × 100

^y 第20節までの長さ

^x 摘心後に先端部から発生した副梢の長さ

^w 先端部から発生した副梢の節数

^v nsは有意差なしを示す(t検定、n=3)

(表1)。果実への受光環境について相対日射量で比較したところ、処理区による差はみられなかった(表1)。果実品質について、着果節位を4グループに分けて比較したところ、果実重と糖度に差はみられなかったが、果皮色のカラーチャート値は11-15節で、90度区に比べ45度区で大きかった(表2)。以上の結果から、結果枝の斜め方向への誘引は、結果枝の生育や果実品質にほとんど影響しなかったが、果皮色の向上には効果がある可能性が示唆された。

普及上の注意事項

結果枝を斜め方向へ誘引するには列間を2.5m以上確保し、樹冠内の受光環境の悪化を招かないようにする必要がある。

宗田 健二 (農産園芸部)

(問い合わせ先 電話：0790-47-2424)

表2 誘引角度が果実品質に及ぼす影響

節位	処理区	果実重 (g)	果皮色 ^z (CC値)	糖度 (°Brix)
1-5節	90度(慣行)	117.6	6.7	16.2
	45度	110.2	7.0	16.5
	有意性 ^y	n. s	n. s	n. s
6-10節	90度	83.5	6.8	16.1
	45度	76.6	7.1	16.3
	有意性	n. s	n. s	n. s
11-15節	90度	86.6	7.1	15.9
	45度	76.3	7.5	16.6
	有意性	n. s	*	n. s
16-20節	90度	82.1	7.8	17.1
	45度	78.5	7.7	17.0
	有意性	n. s	n. s	n. s

^z 1(緑)から9(紫褐色)のカラーチャートによる平均値

^y *は5%水準で有意、nsは有意差なしを示す(t検定、n=3)